

校注驚鴻記(2)

呉, 世美

竹村, 則行

<https://doi.org/10.15017/2332559>

出版情報 : 文學研究. 91, pp.1-15, 1994-03-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

校注驚鴻記(一)

(明) 吳世美 著
(日) 竹村則行 校注

はじめに

- 一 楊貴妃故事を集大成させた清・洪昇の名曲『長生殿』の構想や表現に大きな影響を与えたと思われる明・呉世美の『驚鴻記』に就いては、これまで僅かに『古本戯曲叢刊』二集に影印資料が公表されたのみで、正面から研究の眼が向けられた事は無かった。本稿では、研究の基礎資料を提供する為に、その一部翻刻を試みることにする。
- 二 本稿は、前稿「校注驚鴻記(一)」(九州大学文学部『文学研究』第九十輯、平成五年三月)に続いて、明・呉世美『驚鴻記』中の第八齣詭計陥梅、第九齣楊妃入宮、第十齣阿妃妬寵、第十九齣梅妃遺賦、第二十齣楊妃曉粧、第二十一齣翠閣好會の各齣について校合し、簡単な注を施したものである。その他の齣の校注については、順次統刊を俟ちたい。
- 三 底本は明・萬曆十八年序刊『新刻驚鴻記』(神田喜一郎博士舊蔵、大谷大学蔵。新刻本と略称する。)を用い、明・世徳堂刊『新鏡重訂出像附釋標註驚鴻記題評』(北京大学蔵、『古本戯曲叢刊』二集影印。標註本と略称する。)とあわせて校合する。
- 四 標註本には、陳氏尺蠖齋(不詳)の手になる頭註を附載するが、本校注では「陳氏標註」として、つとめて採録した。
- 五 俗字や異体字、また特有のくずし字は、原則として旧字体の正字に復する。ただし来・觀・從・為・即など、底本のまゝを襲ったものもある。
- 六 神田喜一郎博士舊蔵本(新刻本)、『古本戯曲叢刊』二集所収本(標註本)の閲覧・複写にあたって、大谷大学図書館、京都大学人文科学研究所の御理解と御協力を得た。記して感謝する。
- 七 底本(新刻本)の刊行以来四〇〇年、『驚鴻記』の校注翻刻を試みるものは、本稿以前には聞かない。難字・句点・注釈等々、

校注者の浅学に因る許多の粗漏を免れ得ないであろうが、諸賢の御指正を賜りたい。

第八齣 詭計陷梅

(小净扮漢王)「平生不作虧心事，半夜敲门不吃驚。若還作了些些事，白日青天也動情」。你道我漢王怎麼說這幾句話，早間蒙聖上賜宴，乘醉戲了梅妃，那梅妃大怒而去，三召不來。我想聖上此時未知，久後一定知道。駙馬楊廻、太師楊國忠、內常侍楊幹光、素多智謀，又屬聖眷，我已令人去，招他們商議避禍之策，怎麼這時還不見來？(末扮一軍校上，跪)「粟千歲爺，駙馬爺太師爺俱到。場內侍在西宮承應，不得來。(小净)妹夫拜揖了。(丑扮楊國忠上，跪)「臣楊國忠叩見殿下，願殿下千歲。(小净)老太師請起。妹夫在上，與老太師有一事請教。(丑)殿下突然召臣，臣不知為甚事。(小净)寡人早間侍宴花廳，多吃了幾杯酒，幹了一件没行止的事。(小净)不是戲弄了梅娘娘麼？我聞得了，你常有些不老成。這件事更不該。(丑)作咎了。臣也聞得殿下忒風流過度了些。(小净)二位休要取笑。如今請二位來，正商議此事，倘是梅妃怨我，在聖上面前，朝夕般長般短，說是說非，俺家何以自安？(小净)只個也保不得。(丑)比如道人家奇奇嫂嫂叔叔，家筵聚會，也是常事，有一等毛手毛脚的小叔，就好把嫂嫂身上捏一把，這奇奇嫂嫂，惱也不惱，你自去想，是也不是。(小净)作哭了。我的天，怎麼好，怎麼好？(小净)我有二計在此。一計，明早殿下入宮，肉胆膝行，只說臣醉，悞躡妃履，實出無心，望陛下念分形同氣，赦有臣罪。二計，我聞得壽王妃子楊玉環，迺楊太師親妹，美色絕倫，待我明日假痴假呆說起，你就從傍幫襯兩句兒。聖上好色無厭，倘得宜幸之時，楊妃入宮，梅妃寵衰，殿下黃金珍寶，厚賂聖上謹身用事的大監楊幹光高力士，日夜造謗梅妃與太子私通。梅亭玩月可証，使聖上廢了太子，殺了梅妃，則殿下安矣。(丑)妙計妙計。(小净)跪了。我的妹夫的爺爺，一法好妙計，妙妙妙。我明日就入宮請罪，一邊就送禮物與高楊兩太監。

[下山虎] (小净唱)金能役鬼。計可迴天。造出如簧語。使他恩愛難睦。(丑·小净唱)今日裏昭陽飛燕。會見汝悲歌團扇。冷落長門幾夜眠。那梅娘娘此時呵。孤鴻在羅網。何日翩翾出九泉。(合唱)又有傾城貌。妬寵爭妍。豈患妻非無過愆。

(净)安排巧計動君王

(丑)任汝妖姬擅玉房

(小净)千把明刀容易躲

注

(1)「宴」、底本は「晏」に作る。標註本によって改める。(2)不詳。諸書にその名が見当たらぬ。(3)「常」、標註本は「使」に作る。(4)『旧唐書』卷五一、『新唐書』卷七六楊貴妃伝、また「楊太真外伝」巻上に「中使(または中人)張韶光」の名が見える。(5)「了」、標註本は「云」に作る。(6)「了」、標註本は「云」に作る。(7)「為」、標註本は「有」に作る。(8)「淨作咲了」、標註本は「淨咲云」に作る。(9)「丑作咲了」、標註本は「丑咲云」に作る。(10)「般長般短」、標註本は「搬長搬短」に作る。般、搬は相通ず。あとの「說是說非」と同じく、有ること無いことを言いふらす意。(11)標註本は「身上」の二字を欠く。(12)「了」、標註本は「云」に作る。(13)「只」、底本は「這」に作る。標註本によって改める。(14)「了」、標註本は「科」に作る。(15)底本は「一邊」の二字を欠く。標註本によって補う。(16)「楊」、底本は「張」に誤る。標註本によって改める。註(4)に示した原名の「張韶光」が暴露したもののか。(17)「如簧」、陳氏標註に「詩、巧言如簧」と。『詩經』節南山之什、巧言の語。(18)「昭陽飛燕」、陳氏標註に「梁飛燕、居昭陽宮」と。『西京雜記』卷一に「趙飛燕女弟居昭陽殿」と。(19)「團扇」、陳氏標註に「團扇已見」と。第二齣梅亭私誓参照。(20)標註本は「唱」字を欠く。(21)「萋菲」、陳氏標註に「詩、萋兮菲兮、成是貝錦」と。『詩經』小雅、節南山之什、卷伯では「菲」を「萋」に作る。

第九齣 楊妃入宮

〔卜算子〕(生扮唐明皇、末・小丑・小生・小外扮四黃門上。生唱)幾務頼安康。時序方熙朗。綺樓華宴奏笙簧。常棣情尤暢。⁽²⁾

寡人有兩兄兩弟、曲意加厚、自謂前代所無。昨日在花萼樓飲宴、不料漢王這廝、狎我宮妃。朕意欲譴怒一番、終不然為這妃子、断却兄弟之誼。天下議朕重色而輕天倫也、只索含忍罷了。(小淨扮漢王上)好色如命、貪酒常癩、年紀老大、心性嬰兒。(淨扮楊附馬上、將小淨耳扯了走進打諢)嬰兒嬰兒、跪在丹墀、君王聖明、汝罪當誅。(同俯伏了)臣附馬楊廻叩見陛下、帶領漢王肉胆請罪。(生)卿有何罪?(小淨)臣蒙吾皇賜宴、力不勝酒、沉醉之時、偶躡妃履、墮脫其珠。罪當萬死、望陛下寬赦。(生)朕不能教訓兄弟。使汝逞酒失儀、此朕之過也。汝既出于無心、朕亦付之不較。二卿起來。(淨・小淨)願吾皇萬歲。(淨)臣聞吾皇諸宮妃嬪、約有三萬餘人、今又命高力士遍訪美女何幹?(生)嬪妃固多、絕色頗少。倘有傾國、以娛暇時。(淨)陛下必欲得傾國之女、莫

如壽王妃子楊玉環。天姿國色，絕世無雙。宣他來看一回何如？（小淨）看一看，又要動火。只是我家姪兒媳婦，是這等不得，科道官員都要談論。（淨）做了皇帝，還怕誰？那一個官兒來說的，搥縛出去，斫做五六段。（生）着高力士宣壽邸楊妃來。（小淨跪了）謹領旨。忙趨金屋去，立候玉人來。（下）

〔劉澄帽〕（生唱）人生聚散真飄蕩。侶白駒過隙流光。朱顏綠鬢還須賞。花月是仙場。豈蓬萊與方丈。

〔前腔〕（淨·小淨唱）後庭玉樹流蘇帳。更夜遊西苑何妨。但佳人絕代難承望。今後看椒房。那人來。誰居上。（貼扮楊妃

與小丑上）

〔六么令〕（小丑唱）官家願望。奈金蓮孱弱趨躒。娘娘你快走，聖上待久也。（貼唱）羅衣驚懼汗流香。含羞頰。倚新粧。此行難卜誰模樣。

（小丑跪了）啓萬歲爺爺。楊妃到。（貼俯伏了）壽王妃子楊玉環，叩見萬歲。（生）呀，果是絕世之色。

〔玉山頽〕（生唱）看你纖紅婉翠。似凝酥。絕世無雙。嬌和恨。意斂眉峯。貌和花。風翻掌上我相偎相向。拚做了慕鳳

貪凰。（貼）妾身已事壽王，天下皆知。今更奉至尊，恐有污清史。（生）既然如此，聞得妃子解禪，可入後宮，為朕誦經祈福。朕今

更娶韋昭訓之女，與壽王為妃罷了。妃子你起來。（淨）老楊的舉薦何如？（生）細着貼了，對淨唱）早是伊來講。險些兒。漢宮埋

沒漢王嬌。

〔前腔〕（貼唱）君王垂盼。奉尊前。妾自周張。那壁廂。敗柳殘桃。這壁廂。難推怎向。我真成薄命。似落葉隨波飄蕩。

到此還休快。只怨高唐。楚雲遮隔兩鴛鴦。

〔尾聲〕（生抱貼唱）此情此緒真奇爽。就人間。似從天上。準備着暮暮朝朝樂未央。

（生·貼下）末·小丑·小生·小外俱下（淨·小淨吊場）

（小淨作嘆了）有這等異事，當真接了進去。

（小淨）天地近來作怪

周公孔子請開

(浄)若非戲弄嫂⁽⁸⁾子

教尔怎得釵

注

(1)「末・小丑・小生・小外」、標註本は「衆」に作る。(2)「常」、標註本は「棠」に作る。陳氏標註に「棠棣之華、鄂不韡々。此宴兄弟之詩。棠、詩作常」と。『詩經』は小雅、鹿鳴之什、常棣の語。(3)「紀」、底本は「記」に誤る。標註本によって改める。(4)「大」、底本は「太」に誤る。標註本によって改める。(5)陳氏標註に「此打諢處、與郭圍⁽⁹⁾乳母相類似。戲中自有解紛微權。此亦滑圈之雄」と。郭舍人の故事は『史記』卷一二六、滑稽列伝に見える。(6)「回」、標註本は「看」に作る。(7)「做」、標註本は「作」に作る。(8)標註本は「六」字を欠く。(9)「了」、標註本は「云」に作る。(10)標註本は「唱」字を欠く。(11)陳氏標註に「李斯傳、人生居世間也、譬猶騁六驥過決隙也」と。故事は『史記』卷八七に見える。(12)陳氏標註に「蓬萊・方丈皆海中山名」と。(13)標註本は「唱」字を欠く。(14)陳氏標註に「玉樹後庭花曲名、流蘇帳名」と。(15)陳氏標註に「漢書、李延年歌曰、南國有佳人、絕世而獨立」と。『漢書』卷九七、李夫人伝に見ゆ。(16)陳氏標註に「官家、唐宋以來、宮中多咏皇帝曰官家。取五帝官天下、三王家天下也」と。原文に「二王」とあるのは「三王」の誤り。『太平御覽』卷一四六に引く『韓詩外傳』によって改める。(17)標註本は「唱」字を欠く。(18)標註本は「跪了」の二字を欠く。(19)底本(新刻本)は「啓萬歲爺爺」の五字を欠く。いま標註本によって補う。(20)「了」、標註本は「科、云」に作る。(21)標註本は「唱」字を欠く。(22)「風」、標註本は「鸞」に作る。(23)陳氏標註に「王嬙、西京雜記、漢元帝後宮既多、不得常見。乃使畫工圖形、按圖召之。諸宮人皆賂畫工、多者十萬。獨王嬙不肯、遂不得見。匈奴入朝、求美人为閼氏。於是上案圖以昭君行。及去召見、貌為後宮第一、舉止閒雅。帝悔之、而名籍已定、帝重信于外國、故不復更人、乃窮案其事、畫工皆棄市」と。故事は漢・劉歆『西京雜記』卷二に見ゆ。(24)標註本は「唱」字を欠く。(25)「桃」、標註本は「花」に作る。(26)「這」、標註本は「那」に作り、上出の「那」に重なる。(27)陳氏標註に「高唐已見」と。第六齣壽邸恩情参照。(28)標註本は「就人間」の三字を欠く。(29)「了」、標註本は「云」に作る。(30)「揆」、標註本は「抱」に作る。(31)「子」、標註本は「嫂」に作る。

第十齣 兩妃妬寵

〔夜行船〕(旦扮梅妃、小旦扮宮女上、且唱)淡蕩春風人盡喜。偏我芳心陪寂寥。(小旦唱)明日陰晴。今宵冷煖。總是天公

(旦)〔採桑子〕恨君不似東樓月、南北東西、南北東西、只有相隨無別離。(小旦)恨君却似東樓月、暫滿還虧、暫滿還虧、團圓是幾時。(旦)念奴你可聞得聖上新納壽邸楊妃否？(小旦)奴婢聞得此女入宮、龍顏大喜、賜名太真。定情之夕、聖上金釵鈿合、娘娘却怎生好？(旦)這也不妨、如今竟往南宮、只說賀喜、看聖意若何。(旦·小旦同行了)

〔画眉序〕(且唱)柳絮任風飄。梧葉秋來自傾倒。問君恩逝水。綵難猜料。拚黃裳。我今日淒涼。那綠衣。是何人

(小旦)此間是南宮前了。(且唱)宮前春煖人珠翠。正是巫山夢杳。(生扮唐明皇上)

〔前腔〕(生唱)美滿那多嬌。(見且了)呀、原來是舊日班姬今問曉。(且俯伏了)賤妾特來賀喜。(生)何喜可賀？你花容

驚啼纖渺。乍相離。覺清夢勞神。忍輕棄。待白頭吟詠。(且)賤妾求見新人。(生唱)遊絲偶惹閑花草。斷不是長門宮奴家楊妃是也。曉粧裁罷。聖召頻推。未審何故、不免近前。(俯伏了)賤妾楊妃叩見。願吾皇萬歲、梅娘娘千歲。(且扶貼美起。(細看貼了)楊美人姿色果美。(生)妃子迺七步之才、可即與朕贊他幾句兒。(且)賤妾謹領旨。有了。「撒却巫山下紫宸、一夜玉樓春。水肌月貌那能似、錦繡江天半為君」。(貼背且私語)他說「撒却巫山下紫宸」、咲奴從壽邸而來。「錦繡江天半為咲奴肉勝的意思了」。(貼對且云)還是娘娘貌美。待奴家即韻、回贊幾句兒。(且)願聞。(貼)「英艷何常減却春、梅花雪裏亦清撻教借得春風早、不與繁桃鬪色新」。(且背貼私語)他說「不與繁桃鬪色新」、咲奴已過時。「梅花雪裏亦清真」、咲奴骨勝的了。(小丑跪)「爺爺娘娘在上、待奴婢粗言俗語、解分幾句兒。(生)高力士、你試說來。(小丑)唐朝女英伴娥媿、趙家姊妹共梅娘娘休要吃醋、楊娘娘不用着芒。有一件、只求爺爺今夜與兩位娘娘在花萼樓上睡罷。(生)怎麼解說？(小丑)樓上有長被、娘娘們姿做一床。爺爺省得般來般去、娘娘省得爭短爭長。

〔滴溜子〕(生·且·貼唱)高力士。高力士。休得亂嘲。(小丑唱)娘娘的。娘娘的。會合今朝。歡咲。同偕到老。如何嫌。添煩惱。管取得風雲遍洽。雨露和調。

〔鮑老催〕(衆唱)珠圍翠繞。衣飄豔蕊香歌渺。羅裙遮定鴛鴦小。看宜春院裏花。無顏好。搥道是青年帝子千金笑

雲玉女雙開道。入椒房。真窈窕。⁽³⁵⁾

〔尾聲〕繡錦帔帳分奇妙。夜沉淪。龍馨鳳膏。(且自唱)又只恐日落空樓鳳罷簫。

(小丑) 一夜皇恩百夜深

(生) 雙娥相好莫相侵(先下)

(旦) 楊美人恭喜 南宮昨日情如海

(貼) 多謝梅娘娘 樛木今朝德似君(同下)

注

(1) 標註本は「唱」字を欠く。(2) 陳氏標註に「女無美惡、入宮見妬、然哉」と。(3) 「公」、標註本は「宮」に作る。(4) 陳鴻「長恨歌伝」に「定情之夕、授金釵合以固之」と。(5) 「了」、標註本は「科」に作る。(6) 標註本は「唱」字を欠く。(7) 陳氏標註に「毛」、緑衣黄裳、□下服黄正色、而以為下服。喻妄奪始、而縁反以為衣也」と。「毛」は不詳。『毛詩』邶風、緑衣に「緑衣黄裳」とあり、その毛伝に「縁當為縁」とある。(8) 「好」、標註本は「了」に作る。(9) 標註本は「唱」字を欠く。(10) 陳氏標註に「巫山夢即高唐夢」と。(11) 標註本は「唱」字を欠く。(12) 「了」、標註本は「科」に作る。(13) 「了」、標註本は「科」に作る。(14) 陳氏標註に「西京雜記、相如將聘茂陵人女為妾、卓文君作白頭吟以自絶。相如乃止」と。漢・劉歆『西京雜記』卷三に見ゆ。(15) 標註本は「唱」字を欠く。(16) 「了」、標註本は「云」に作る。(17) 「了」、標註本は「科」に作る。(18) 「見」、標註本は「頭」に作る。(19) 「了」、標註本は「科」に作る。(20) 標註本は「即」字を欠く。(21) 「錦」、標註本は「綿」に誤る。(22) 「天」、標註本は「山」に作る。(23) 「語」、標註本は「云」に作る。(24) 「天」、標註本は「上」に作る。(25) 標註本は「了」字を欠く。(26) 底本は「對且云」の三字を欠く。いま標註本によつて補う。(27) 「語」、標註本は「云」に作る。(28) 「了」、標註本は「云」に作る。(29) 陳氏標註に「女英娥皇、帝女舜妻」と。(30) 陳氏標註に「趙家姊妹、合德燕飛」と。燕飛は飛燕の誤り。(31) 標註本は「們」字を欠く。(32) 標註本は「生・貼・且唱」に作る。(33) 標註本は「唱」字を欠く。(34) 陳氏標註に「苴蔻花開葉間、號含胎花、故以為幼女含胎之喻」と。宋・姚寬『西溪叢語』卷上に「苴蔻花……花生葉間。南人取其未大開者、謂之含胎花、言尚小如姪身也」と。(35) 陳氏標註に「紅云、玉皇所居嘗有紅云擁之。雖真宮、罕見其面」と。『佩文韻府』紅雲に引く「異聖伝」(『駢字類編』『大漢和辞典』は「翼聖記」に作る)に「玉帝所居、常有紅雲擁之」と。(36) 底本(新刻本)、標註本ともに「窈」に作るが、

「窈窕」の熟語によつて、「窈」に改める。

第十九齣 楊妃遺賦

〔不是路〕(旦扮梅妃上唱)永夜躊躇。夢見君王覺後疑。秋歸矣。真誠薄命久尋思。掩朱扉。笙歌一派西宮至。添得樓東分外妻。無聊處。清宵悶把欄干倚。倩誰憐取。倩誰憐取。

〔露濕晴花滿院香、月明歌舞在昭陽。似將海水添宮漏、共滴長門分外長〕。奴家梅妃是也。別館閑居、君思不繼、適纔睡魔中、忽聽得笙歌鼎沸、想是花萼樓慶賞千秋、對此閒庭風月、好傷感人也。

〔前腔〕(小丑扮高力士上、唱)月落星稀。始信離宮倍慘淒。苔深際。風寒露冷怯秋衣。信傳時。怕樓東翻惹長吁氣。有甚恩情恹夢思。(旦唱)聞人語。呀。原來大內高常侍。為何來此？為何來此？

(小丑跪)高力士叩見娘娘殿下、願娘娘千歲。(旦)高常侍、有甚好風、吹得你来？(小丑)聖上慶賞千秋、十分追念、着奴婢來問消息。(旦)皇上終棄我乎？(小丑)這個不關萬歲爺事。楊娘娘甚是妬悍、聖上也怕他。(旦)恐恰我、則動肥婢情、豈非相棄也。昔漢武為平陽而棄阿嬌、相如賦長門以回君意。當今才子、莫過李白杜甫、聞李承旨就是做清平調的。我怎麼敢勞他、煩你傳旨杜拾遺、要他做樓東賦一篇、黃金千兩、為杜君壽。(小丑)當時漢宮無才、遂令司馬逞技。娘娘才誇道韞、學富大家、信筆一揮、足驚風雨。要那杜拾遺怎的？(旦)高常侍、你聽我道來。

〔別銀燈〕(旦唱)這衷腸。愁懷怎題。縱傳辭。難回君意。襄陽杜甫多才思。煩君去。傳與伊知。賦辭。要申個雄雌。奉千金。助他酒資。

〔前腔〕(小丑唱)漢多嬌。無才自據。這操觚。除非相如。娘娘呵。你詞源豈讓襄陽士。賦梅花。君王自知。霎時。揮毫尺蹠。管驚散。霓裳羽衣。

〔前腔〕(旦唱)賦樓東。何似清平調兒。是君家。宣來承旨。羊推故阻非真意。這炎涼。吾心已知。(小丑跪)娘娘與言及此。奴婢罪當萬死、只是楊娘娘十分利害。奴婢真情不敢。(旦唱)吾今。也不怨伊。想紈扇。終須自題。

(小丑) 既如此、奴婢在宮門外伺候。有了賦、纔去回覆萬歲爺。(旦) 煩你等一等。

(旦) 長門只合自悽悽

猶道君恩更可移

(丑) 休把黃金買詞賦

相如元是薄情的⁽¹⁹⁾

注

(1) 標註本は「唱」字を欠く。(2) 「宵」、底本は「霄」に作る。標註本によって改める。(3) 標註本は「上唱」の二字を欠く。(4) 「寒」、標註本は「前」に作る。(5) 標註本は「有甚」の二字を欠く。(6) 標註本は「唱」字を欠く。(7) 「了」、標註本は「云」に作る。(8) 「事」、標註本は「爺」に作る。(9) 「清平調」、標註本は「清詞」に作る。(10) 陳氏標註に「道韞、謝太傅女。詠雪有「不如柳絮因風起」之句。大家、班彪女名昭、為曹世叔妻、號曹大家、音姑」と。謝道韞は『晉書』卷九六、曹大家は『後漢書』卷八四にそれぞれ伝がある。(11) 「要」、標註本は「何須用」に作る。(12) 標註本は「你」字を欠く。(13) 標註本は「旦唱」の二字を欠く。(14) 標註本は「唱」字を欠く。(15) 「尺」、標註本は「赫」字に作る。(16) 標註本は「唱」字を欠く。(17) 「了」、標註本は「云」に作る。(18) 陳氏標註に「紈扇已見」と。第二齣梅亭私誓に見ゆ。(19) 「的」、標註本は「兒」に作る。

第二十齣 楊妃曉粧

〔虞美人〕(生扮唐明皇、末・外扮¹黃門上。生唱) 春宵錦幙鸞凰侶。往事休憂慮。長門芳草暗孤琴。一夢悠悠。五載到于今。

昨晚歛場感舊、差遣高力士往探梅妃消息。怎広還不見來？(小丑扮高力士上) 離宮探取凄凉狀、來報多情聖主君。(俯伏了) 奴婢奉聖旨、往樓東看梅娘娘。特來覆爺、梅娘娘十分可憐。(生) 你却細說。

〔紅衲襖〕(小丑唱) 他那裡³薄衾寒促綉鞋。他那裡³凭欄干織翠黛。只見他銀缸明滅情無賴。楚袖何年。去整上雲雨臺。

對閑風。歌落梅。望龍光。⁽⁴⁾ 如大海。(生) 那梅妃不怨朕広？(小丑唱) 他溫柔性是天成。怎敢怨着君王也。只片時做一篇樓

東賦、與奴婢奉上萬歲。千愁萬緒。却向毫楮揮。(作送賦上了、生作接賦看了)

〔青衲襖〕(生唱)他效漢長門。相思忒害。直恁的才學高。心意耐。追章琢詞。何用黃金買。唉、梅妃梅妃 我真非性歹。你敢是怨埋。(8)

〔小丑〕奴婢謹領旨。(急作行了)(小旦扮念奴上)娘娘出來了、你做甚勾當? 高常侍、你行色匆匆出建章、莫將辛苦惹灾殃。(小丑)念奴姐、你各人自掃門前雪、休管他家瓦上霜。(下)(貼扮楊貴妃作睡起上)

朕今晚臨幸。不可使楊妃聞知也。你到樓東。忙傳令旨。須索傍龍駒峭地裡來。

〔江頭金桂〕(貼唱)我聽得蜂喧蝶啐。兀自理花鈿出綉幃。(生携貼手唱)緣何披着雲鬢。懶上陽臺。那鬢兒香搵腮。妃子可急理曉粧、今日將午矣。(貼作梳粧了)(貼唱)我轉鏡清開。認遠山凝翠。待謝却鸞釵鳳擘。素影徘徊。(生)朕數日間、手製七宝金釵、以奉妃子。(作挿髮了、唱)我和你粧成雲錦堆。似神歸洛水。接天光彩。(合唱)謾相偎。又何須群玉霞中見。這就是瑤池月下來。

(貼)起樓侵碧漢

(生)初日照紅粧

(衆)絕代終難及

承歡殊未央

注

(1)標註本は「二」字を欠く。(2)「了」、標註本は「科云」に作る。(3)「裡」、標註本は「裏」に作る。(4)陳氏標註に「龍光殿名」と。清・徐松『唐兩京城坊考』巻五によれば、東京に龍光門は有るが、龍光殿は無い。(5)「作送賦上了」、標註本は「送通賦上科」に作る。(6)「了」、標註本は「科」に作る。(7)標註本は「唱」字を欠く。(8)「怨埋」、標註本は「埋怨」に作る。「埋」は韻字。底本(新刻本)が正しい。(9)宋・無名氏「梅妃伝」に「密以戲馬召妃、至翠華西閣」と。(10)「樓東」、標註本は「東樓」

に作る。(11)了」、標註本は「科」に作る。(12)標註本は「唱」字を欠く。(13)了」、標註本は「科」に作る。(14)了」、標註本は「科」に作る。(15)陳氏標註に「洛神賦、靚一麗人于巖之畔。又臣聞河洛之國名曰宓妃、則園王之所見也」と。『文選』卷十九所収の曹植「洛神賦」参照。(16)標註本は「唱」字を欠く。(17)陳氏標註に「團圓二句、即李白清平(調)詞、若非團玉山頭見、會同瑤池月下逢。□意」と。李白「清平調詞」三首は『全唐詩』卷一六四所収。其の一は「雲想衣裳花想容、春風拂檻露華濃。若非群玉山頭見、會同瑤臺月下逢」と。

第二十一齣 翠閣好會

(小丑扮高力士、騎飛馬上)『昨夜樓東倍寂寥、柏梁前殿月輪高、河間歌舞新承寵、猶自慙慙念阿嬌』。聖上着俺高力士密召梅妃、這差使明知不當穩便、須索走一遭也。(作趕行了唱)

〔北鴈兒落〕俺如今向東樓待舉鞭。則道是密文移穿庭院。開嘈嘈棲鴉枝上啼。戰危危匹馬樓頭閃。慢自誇新月度牽牛。抵應是舊壘歸飛燕。活央殺追風躡電躡。早成就倒鳳顛鳳顛。梅娘娘呵 恁譬如花再鮮。鏡重圓。還。還。還一似雪消春暖。又恐怕風也漏傳。峭自裡暗暗依香上廣寒。(做飛馬下了)(旦扮梅妃晚粧上、唱)

〔南沉醉東風〕嘆孤幃。梨花羞見。步閑庭。長夜如年。聽鴈陣過東樓。燭冷金猊暗。東風不管。任意下離腸欲斷。凄清自遣。嫦娥自眠。傷心處。追歡別院。咲喧。(小丑飛馬趕上、唱)

〔北收江南〕呀。猛可的這般難捱呵。却誰道有良緣。(作見旦了)報報報、聖上差奴婢來召娘娘至翠華閣上、娘娘呵、恁受盡了衾寒枕寒、悶懣懣。裁今寶馬整雕鞍。是君王見憐。是君王召宣。(旦)既是君王寵命、緣何飛馬暗地裡來？(小丑作下馬俯伏了)此情娘娘自知。只為妬冤家。梵的來阻牽。(旦作悲了)我那君王呵、又為何怕着那胖人頭也。(唱)

〔南摧拍〕坐朝堂。畏他潑賤。想長門。不能保全。你也枉然。你也枉然。威福難憑。冠履倒頭。(小丑)娘娘你急上馬去也。(抱旦上馬速行了)(小丑唱)

〔北得勝令〕呀 俺只怕那。那望懸懸。却又奈這。這淚漣漣。娘娘呵 題起上綠衣篇。做甚的。想着紫霞群。真共羨。

乘駿馬朝天。把玉笛昭陽按。舞驚鴻錦纏。待君王帶咲看。(旦唱)

〔南忒忒令〕你信道。君王意堅。我只慮。嬌容微變。花開花謝。幾度空留戀。還疑是夢兒邊。還疑是夢兒邊。待朦朧。轉嗚咽。馬上續殘怨。(小丑唱)

〔北沽美酒〕覷雙眉。柳葉妍。美滿月。桃花面。記曾減了芳顏。瑤臺園苑洛水仙。似娘娘也並儔。此間已是翠花閣了。想聖駕到來。娘娘向。咲滋滋。拜尊前。(生扮唐明皇上側耳聽好音。臨風候故人。呀。高力士却來也。(小丑見生做扶且下馬。俯伏)奉聖旨。召梅妃已到。(携且付生)唱却又哭啼啼。麗情煎。

(且作哭俯伏)梅妃蒙召。叩見吾皇。願吾皇萬歲。(生抱且起共悲)呀。妃子。朕那一日不想你來。(且賤妾負罪。將謂永捐。不意得復見天顏于此。(生·且共唱)

〔南醉歸遲〕恰相逢。尤繾綣。由來翠帳多情伴。那說個離合悲歡。心變。新婚晏晏。不強似遠別嬋娟。這其間。拚個軟柳含烟。小桃寬擺。訴出當年相向梅亭誓愿。(生唱)幾迴裏。夢伊在歌邊舞邊。幾迴裏。夢伊在燈前月前。却裁是今夜好姻嫁。(且唱)妾豈敢懷着些兒。尤心怨言。只啼着西風杜鵑。只抱着雲和耐寒。(合唱)轉覺道兩意如綿。豈是三星在天。(生·且同下)(小丑唱)

〔北川撥棹〕看他們煽合歡。想今宵似錦繡。俺輕輕的告着天。須則是閨個更兒。海水漏添。留着羲和。曉白漫先。那鷄休死聲啣嘴。輕喚起悠悠香夢轉。(貼扮楊貴妃。小丑扮念奴同急走。上唱)

〔南朱奴兒〕遊風月。迷離那邊。尋蹤跡兔狡蝶翻。那高力士。為何荒荒張張在此？(小丑作俯伏)奴婢有。(貼)御榻前有甚人在裡邊。好從寔說來。(小丑)奴婢不知甚麼人。(貼)走。還哄我來。(貼唱)敢是伊。偷插翠鈿。管取你。命歸九泉。(小丑)奴婢怎麼敢。(唱)

〔北梅花酒〕望娘娘心莫嫌。望娘娘心莫嫌。搵鶯啼和那蜂喧。與高力士甚麼干。(貼)既是無人。你可急報聖上。妃子來也。(小丑作向俯伏叫)粟萬歲爺。妃子已屈閣前。(生·且忙走上)宸遊此夜歡無限。又奈烏聲襍管絃。(小丑近前低唱)鍾情處。耳

屬垣。妬色呵。蹤要掩。(貼)高力士，怎不見轉來。(生作驚，抱旦藏躲)「(35)」
娘子你權在夾幙間。(37)朕自有處置。(38)(小丑潛挽旦低語)「(39)」
快去罷。(旦作失銀鈿珠罵了)「(40)」小丑低唱委珠鈿。倩誰收。一霎時。雨雲黯。(扶旦下)

(生出見貼了)「(41)」娘子何遲來？(貼)陛下何晏起，日移餉午，尙未臨朝，豈成個皇帝。敢是有梅精在此，迷惑聖躬。(生此女已屏置樓東多年了，何由到來？(貼向地下拾起銀鈿珠罵了)「(42)」既是有梅精，這金釵翠鈿是誰帶的？只兩寸弓鞋是誰穿的？(生作坐睡)」
(貼唱)

〔南川撥掉〕遮和掩。戀嬌粧。沉業冤。却為何色阻情牽。却為何色阻情牽。頓忘了皇輿幅幘。夢兒中妮萬般。意見中難消遣。(將銀鈿珠寫歸生前，走下)

(生作睡)「(43)」娘子去矣。念奴過來。(小旦俯伏)「(44)」奴婢有。(生梅妃何在？(小旦)高力士怕楊娘娘嗔怒，步送樓東去也。(生作喚)「(45)」梅妃梅妃，汝月魄花容，雖是入宮而見妬，朕雲情雨意，寔非棄舊而憐新。太原之簪，豈忍永遺，延平之劍，終須復合。念奴可捨他金釵翠鈿珠罵封好。朕昨有土蕃獻來珍珠一斛，并賜梅妃。(小旦)奴婢領旨。(作拾銀鈿珠罵了)「(46)」(生)玉笛歌還團扇後，驚鴻舞出嬪行前。(小旦)主恩一夜深如海，好把明珠領合歡。(生·小旦同下)(小丑·旦上)(小丑唱)

〔北太平令〕却離了。金宮寶殿。空回首。臉咲花燃。(旦作悲)「(47)」君王呵，此別後，竟不知幾時得進幸也。(小丑唱)漫悲傷。白雲龍遠。耐棲遲。碧簫鸞倩。我呵。從今後幫伊襯伊。準備些靈馳驚騫。呀，那憑他駭天妬婢。

(小旦忙走上)「(48)」臂弱不勝珍賜重，心忙惟恐珮聲遲。(向旦跪)「(49)」娘娘脫下金釵翠鈿珠罵，聖上特封了，差奴婢送還娘娘，更有珍珠一斛，酬報雲雨之歡。望娘娘收下。(旦作悲)「(50)」念奴姐，「(51)」柳葉雙眉久不描，殘粧和淚污紅綃，長門自是無梳洗，何必珍珠慰寂寥。(52)」鈿寫誰收。珍珠完趙，為我報謝至尊，千萬保愛，自嘆紅顏薄命，只且白首長門。(旦唱)

〔南錦衣香〕報瓊瑤。春風面。守淒涼。孤扉掩。自是君恩。霜搖露變。秋來日日向人寒。梨雲暮雨。儘遣芳年。愧明皇厚賜。下巫山。轉增哀怨。微月籠梅處。冰絃欲斷。拍天湘水。啼群旅雁。(53)(小丑唱)

〔北清江引〕重重說。盡情和怨。皂白終須見。巧咲自花間。憔悴寒庭面。豈是當熊女。落燕姿。到底歌團扇。

(小丑)響珮春風散

(小旦)嘯蟻秋氣來

(旦)妾心渺無際

此別永徘徊

注

(1)陳氏標註に「悽怨愁喜交絶」と。(2)標註本は「壘歸」の二字を欠く。(3)「譬」、底本は「辟」に作る。標註本によって改める。(4)「暖」、底本は「煖」に作る。標註本によって改める。(5)「怕」、底本は「他」に作る。標註本によって改める。(6)「裡」、標註本は「裏」に作る。(7)「了」、標註本は「科」に作る。(8)「燭」、標註本は「獨」に誤る。(9)「了」、標註本は「科」に作る。(10)「裡」、標註本は「裏」に作る。(11)「了」、標註本は「云」に作る。(12)「了」、標註本は「云」に作る。(13)「你」、底本は「作」に作る。標註本によって改める。(14)「了」、標註本は「科」に作る。(15)李白「清平調詞」に「長得君王帶笑看」と。(16)陳氏標註に「瑤臺・閬苑□□因所居」と。瑤臺・閬苑は仙女の居所である。(17)「了」、標註本は「云」に作る。(18)「了」、標註本は「科」に作る。(19)「了」、標註本は「云」に作る。(20)「了」、標註本は「云」に作る。(21)「歸遲」、標註本は「遲歸」に作る。(22)陳氏標註に「詩、燕爾新婚、如兄如弟」と。『詩經』邶風、谷風の語。(23)標註本は「唱」字を欠く。(24)標註本は「唱」字を欠く。(25)陳氏標註に「雲和、琴瑟之屬」と。『周禮』春官宗伯、大司樂に「雲和之琴瑟」と。(26)標註本は「唱」字を欠く。(27)陳氏標註に「三星在天、毛詩」と。『詩經』唐風、綢繆の語。(28)「生・旦同下了」、標註本は「生、同旦下科」に作る。(29)陳氏標註に「尚書、乃命羲和□□日之官。又山海經、羲和東方國名、日過處」と。『尚書』虞書、堯典に「乃命羲和」と。また『山海經』大荒南經に「東南海之外、甘水之間、有羲和之國」と。(30)底本は「同」字を欠く。標註本によって改める。(31)「了」、標註本は「云」に作る。(32)「了」、標註本は「科」に作る。(33)宋・無名氏「梅妃伝」に「侍御驚報曰、妃子已届閣前、當奈何？」と。(34)底本は「云」字を欠く。標註本は「科」に作る。(35)陳氏標註に「詩、耳属于垣」と。『詩經』節南山之什、小弁の語。(36)「了」、標註本は「科」に作る。(37)宋・無名氏「梅妃伝」に「上披衣、抱妃藏夾幘間」と。(38)底本は「置」字を欠く。標註本によって補う。(39)「語」、標註本は「云」に作る。(40)「釵鈿珠烏了」、標註本は「釵翠鈿珠烏科」に作り、「翠」字を衍す。(41)「了」、標註本は「云」に作る。(42)標註本は「有」字を欠く。(43)標註本は「下」字を欠く。(44)「了」、標註本は「科」に作

る。(45)「了」、標註本は「科」に作る。(46)「嬌」、底本(新刻本)は「喬」に作る。標註本によって改める。(47)陳氏標註に「詩、太國是疆、幅幘既長、幅廣幘均、疆境廣大、寬平又長也」と。『詩經』商頌、長發に「外太國是疆、幅幘既長」とあり、その毛伝に「幅廣也。幘均也」とある。(48)「醒了」、標註本は「醉科」に作る。(49)「了」、標註本は「云」に作る。(50)「了」、標註本は「云」に作る。(51)陳氏標註に「文選、太原之婦、哭其亡簪」と。『文選』卷五五、陸機「演連珠」に「少原之婦、哭其亡簪」と。(52)陳氏標註に「晋書、雷煥圖豐城獄、得二劍。一曰龍泉、一曰太阿。煥以其一遺張華。□□此莫邪也。千將何復得。雖然、神物當終合耳。後華誅、失劍所在。煥卒、子華持劍過延平津、其劍忽于腰間躍出墮水。没水求之、但見兩龍各長數丈、光耀水波。□□然此二句、又伏後案」と。故事は『晋書』卷三六、張華伝に見える。「延平之劍、終須復合」の二句が後案の伏線であるとは、一度は寵愛を失った梅妃が、再び明皇の寵恩に浴することを指す。(53)宋・無名氏「梅妃伝」に「上在花萼樓、會夷使至、命封珍珠一斛密賜妃」と。(54)「了」、標註本は「科」に作る。(55)「了」、標註本は「云」に作る。(56)「了」、標註本は「科」に作る。(57)「釵」、標註本は「銀」に誤る。(58)「綃」、標註本は「消」に誤る。(59)宋・無名氏「梅妃伝」に「柳葉雙眉久不描、殘妝和淚濕紅綃。長門自是無梳洗、何必珍珠慰寂寥」と。(60)標註本は「且唱」の二字を欠く。(61)陳氏標註に「瓊瑤已見」と。第十八齣花萼霓裳の陳氏標註に「詩、投我以木桃、報之以瓊瑤」とある。『詩經』は國風、衛風、木瓜の語。(62)「扉」、標註本は「扇」に作る。(63)陳氏標註に「漢書、上幸虎上殿、熊逸欲上殿。婕妤直當熊立。熊去。上召問之、對曰、臣聞猛獸之□得人而止。臣恐熊犯御座、故敢以身當之。由是上益重之」と。故事は『漢書』卷九七下、馮婕妤伝に見ゆ。